

世界最高の幼児教育 レッジョ・エミリアからいま学ぶこと

秋田喜代美
Akita Kiyomi

「世界で最も優れた10の学校」*に選ばれ、米Googleの社員が利用する預かり保育にも取り入れられるなど、注目を集める幼児教育のレッジョ・エミリア。イタリアの小さなまちから生まれた、独自の哲学にもとづく保育実践は、単なる幼児向けの教育理論に留まるものではない。コロナ禍のいまだからこそ、その実践を見つめ直し、あらためて学んでみたい。

*1991年 ニュースウィーク誌

はじめに レッジョ・エミリアとは

いまアフターコロナ、ポストコロナの教育について議論がなされています。園や学校が閉鎖中の子どもたちの本音を聴いてみると、公教育のなかで、先生が自分たちのことを気にかけ、心を砕いてくれていること、仲間との語らいなど当たり前だに思っていた人と人とのつながりの意味や、日々の生活リズムを学校生活がつくっていたことなどが語られます。そのなかで大事なことは、以前の教育に戻るのではなく、この間の経験を踏まえ新たな教育の日常へと挑戦していくことでしょう。たとえば、対面からオンラインになったことが問題なのではありません。オンライン授業により対話が減り、先生たちからの一方向の情報通信が増え、課題を多く出すことが教師の役割であるかのような教育に対して、子どもたちはそれは違うのではないか、もっと主体的に関わりあう時間を、

と声を挙げています。子どもたちは自分たちの声を聴き、そして自分たちの可能性や主体性を引き出し大人も子どもも共に育ちあうネットワークやまち、コミュニティがつくられていく教育がさまざまなツールにより展開していくことを、これからの新常態の教育に期待しています。

「聴くことの教育学」を中核の理念とし、これからの教育にヒントを与えてくれるのが、イタリアのレッジョ・エミリアの教育です。エミリアとあるので、女性の研究者の名前と時に誤解を受けがちですが、これはエミリア地方（レッジョとは地域、州の意味）の教育という意味です。北イタリア、レッジョ・エミリア市の第二次世界大戦後に生まれた乳幼児の保育・教育実践や制度と、その実践を支えてきたローリス・マラグッツィの哲学にもとづく教育実践やまちづくりが、1990年代に北米をはじめ国際的に紹介されるようになり、これからの時代の教育として脚光を浴びるようになりました。



乳児保育所や幼児学校の建物には「ピアッツァ（広場）」（右）という明るく開けた空間を中心に年齢別に教室を配置。教室は「アトリエ」（左上）のほかに、2部屋の「ミニアトリエ」があり、1部屋は照明を落とし集中しやすい工夫がされている（左中）。空間や環境を重視するため、ゆがんだ鏡や三角形に組まれた鏡（左下）などが多用されているのも特徴的。



出典／DVD『子どもたちの100の言葉——レッジョ・エミリア市の挑戦2001』（監修・構成／佐藤学、秋田喜代美）

いまではその哲学や考え方が世界中に広がり、幼児教育関係者だけではなく、国によっては小中学校の教育にも、この思想は影響を与えるようになっていきます。レッジョ・チルドレンという組織を中心に、国際ネットワークも構築しています。日本もこのネットワークに2019年度から正式に加盟参加をしています。大事なことは、これは特定の教育技法や手法としてのアプローチを取り入れるという発想ではないことです。「レッジョ・エミリアの哲学や思想に触発（インスパイアード）された実践（Reggio-inspired approach）」と呼ばれています。

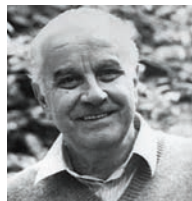
《特徴1》子どもたちの100の言葉と聴くことの教育学

今年2020年には、ローリス・マラグッツィの生誕100年を迎えます。また今回の新型コロナウイルスで、イタリアでも多くの感染者が出たことは、まだ記憶に新しいと思います。しかしそのようななかでも、レッジョ・チルドレンはいち早く、子どもたちの権利を守ることを動画配信などで訴え、対話と呼びかける活動をしていました。常に子どもも市民として考え、大人も対話と参加によってよりよい社会を考えていくために動く

というところが、レッジョ・エミリアらしきとも言えるでしょう。YouTubeでReggio Emilia、Reggio Childrenと検索すれば、多くの動画や教育の風景を見ることが出来ます。20年以上にわたる多くの人を惹きつけている魅力について考えてみたいと思います。

1歳児のルチアはテーブルの前の椅子に座り、ショッピングカタログを見えています。その傍らに保育者が座っています。ルチアが腕時計の頁の写真に関心を示し指さします。そして保育者の方に顔を向け質問するような眼差しを向けます。その姿を見て保育者は身体を彼女の方に傾け、自分の腕時計を見せます。そしてルチアの様子を見守っています。そして彼女の関心を確かめ、その腕時計を彼女の耳元に当てます。チクタクという音をルチアはじつと聴いています。そしてその後再度カタログに目を戻します。保育者が見ていると、ルチアはその腕時計の頁に頭をくっつけ耳を当てています。そこから、ルチアが腕時計と針の音との関係に気づき、その関係の仮説を自分でたてて確かめようと行動したことが分かります。6枚の写真からなる記録です。そして動画には、「子どもは探究者（researcher）である」という語が入っています。この動画では保育者と子どもの間にはひと言の言葉もありません。しかしそこには、

あきた・きよみ
東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長、教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学、東京大学）。東京大学教育学部助手、立教大学文学部講師、助教授を経て、1999年より東京大学大学院教育学研究科に勤務し、現職。主な著書に『学びの心理学―授業をデザインする』（左右社）、共著に『GIFTS FROM THE CHILDREN 子どもたちからの贈りもの―レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践』（明文書林）などがある。



古代ローマ時代に建設された都市で、今もなお中世のまち並みが残るレッジョ・エミリア市。第二次世界大戦直後に市民たちが、まさにその手で園をつくったことから始まった幼児学校だが、創始者でもあるローリス・マラグッツィがその理論と実践を支えていた。

保育者と子どもとの対話があり、子どもと腕時計との間につながりが生まれている姿を確かに観ることができます。年齢などによらずその子の有能さを捉えようとする姿勢と、子どもへのイメージがあります。

ここで語られる「聴くことの教育学」は、子どもの言葉を聴いて記録することを意味するものではありません。この子が何を探究しようとしているのかを、言語非言語問わず多様な次元で聴こうとする、大人の関与があります。子どもたちの「100の言葉」を聴き取るという姿です。レッジョ・チルドレンの「ペダゴジスタ（日本で言えば指導主事や助言者のような人）」であり哲学を語るカール・リナルディは、多様に聴く文脈とは「教えること―学ぶこと」の関係をひっくり返す（overtun）ものと述べています。教師と子ども、子ども同士、誰もがその関係をひっくり返していくことも述べています。「ひっくり返す」とは何でしょうか。大人が教え子どもが学ぶ、という関係を問い直すことです。また子ども同士も、関係性や事物とのつながりを互いに聴き合い、思いの枠に出会うことを意味しているのです。レッジョ・エミリアの実践を北米に紹介した、レラ・ガンディーニさんが語った次のような言葉があります。

「保育者にはふたつのポケットが必要。ひとつは専門的な知識を入れるポケット。そしてもうひとつは不確かなものを問うポケット」という言葉です。聴くということは、「不確かさ」を問う行為として成立します。そこには、「教え―学ぶこと」とは、知識を知らない者に伝達する行為としてではなく、起きている出来事のなかで不確かさを問うことで、既存の思いの枠組みから解放され

「出会う」ことという思想があります。

つまり、自らを新たにし、知の主体となって、仲間と共に知を共同構成していくことが学びである、という協働的な学びの哲学があります。マラグツィーは、教師や保育者を「不確実性についての専門家」と呼びました。不確かということを悪いことではなく、大事なこととしたのです。聴くことの根底にあるのは、単に注意深く人の話を聴くことを子どもに求めることではありません。探究し、常に変化していくことで、社会の多様性や豊かさに出会うことを学びとする哲学なのです。

レッジョ・エミリアの協同組合パンタレイのペダゴジスタであるフランチェスカ・ビアンキさんは、子どもたちが対話し探究をするプロジェクトの秘訣を「子どもたちの問いに対して、良質の問いを返すこと」と言われました。これは不確かさへの専門家の哲学を象徴する言葉です。大人は子どもとの問いに対して、答えを与えることが自分の役割と考えていることが多いように思います。また、お決まりの仕方で「本や図鑑で調べてみたら」と指示したりしていないでしょうか。その子どもの問いの意図や背景の文脈を聴き取り、子どもの問いに対し、さらにより良質な問いとして問い返すことが、ひとつの答えを与える以上に、より深い探究を生み出す。そこに学びたいと思います。

これからの社会は、不確かで急激に変動する時代です。そこにおいて、子どもたちに求められる学びの哲学をレッジョ・エミリアは示しているのです。研修というと、さまざまな知識を与える研修が教員向けにも多く組まれています。しかし、知識という片方のポケットだけではなく、不確かさを問うもうひとつのポケットを持つマインドセットが大事なのです。

ば、将来の社会に役立つという発想ではありません。子どもの現在の姿のなかに私たちの社会の可能性があると観る見方です。

そのために記録をとることとしての「ドキュメンテーション」とそのドキュメンテーションを通して、保育者や保護者も地域の人も共に語り合うことで、人と人とのつながりが生まれていくという発想が大事にされていることが、大きな特徴です。それによって私たちは、「Image of the child」、子どもをどのような存在として見るかを、具体的に捉えることができます。「子どもが最も大きく見える瞬間を捉える」ことが大切にされます。

左上の写真を見てください。子どもが堂々と自分が撮りたいと思っているものを撮影している姿を捉えています。また、子どもたちの作品がまちの公会堂の幕に飾られていたり、公園に子どもた



まちの文化にふれ記録しようとしている瞬間の子どもは、夢中になっている。子どもが最も大きく見える瞬間の一例として、レッジョ研究者から提供された写真。写真提供／ Ben Mardell



公園や公会堂などの公共の施設や店舗など、子どもたちの作品はまちのいたるところで見ることができる。すでに地域の文化財の重要な構成要素にもなっているようだ。



教育の専門指導を行う「ペダゴジスタ」と教師や職員が集まり、定期的に話し合いが持たれている（右）。また、親が集まる「親の会」や、親と市民のための「学習会」（左）なども定期的に行われており、教師と保護者が学びの共同体を形成している。

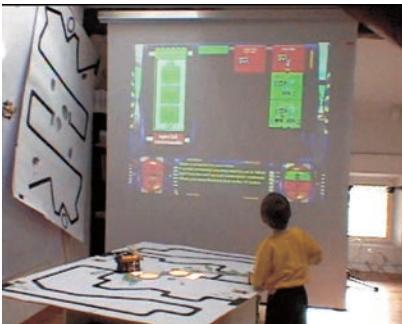
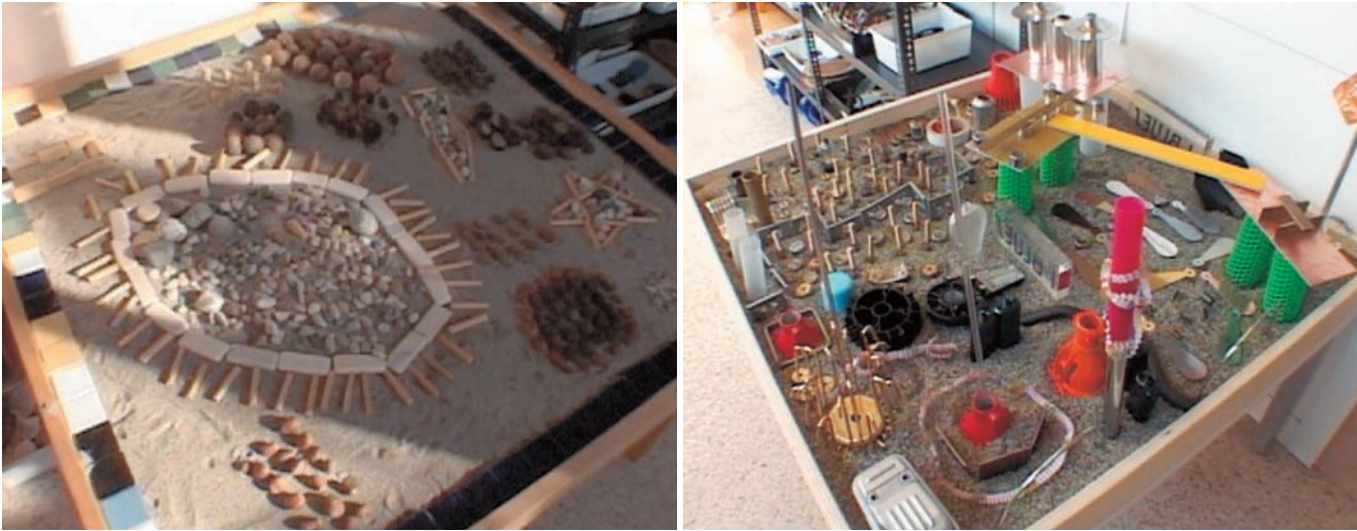
《特徴2》子どもを中心として 共につながり学び合うコミュニティ

レッジョ・エミリアの子どもの見方として、「各々の子どもは可能性、希望の始まりである。そして多様なレベルでの意識、意思、勇気、そして子どもを受け入れる国の政治の影響を深く受け

ちの詩や作品が飾られていたり、靴屋さんを訪れた子どもたちが描いた靴の絵が店先に飾られていたりといった様子も見られます。また、地域の廃品リサイクルセンターとつながり、そのものが子どもたちの作品の素材として使われたりということもなされています。皆が、子どもの声や姿を共に尊重し、語り合う文化がつくられています。

また、そうした子どもの見方を中心に、生み出す人としてのペダゴジスタや子どもの可能性を、アートによって引き出す「アトリエリスタ」という専門家がいます。そうした人びとが園と園、園とまち、園と人びとをつなぎ、さらに保育者の専門性を高める役割を担っています。地域文化、コミュニティを大人も子どもも問い続けるプロジェクトが、レッジョ・エミリアの特徴でもあります。それはワクワクするような情動経験を共有し、新たな気づきや発見をもたらしてくれそうという知的な仕事であるだけでなく、専門家としての手応えや楽しさの共有も含まれるからこそ、コミュニティの連帯感覚を生むものでもあるのです。

今回の新型コロナウイルスの感染予防対策のなかで、私たちは物理的な隔離があっても、心がつながるためには何が大事かを感じ取ってきました。そして、そこにさまざまなデジタルツールが機能することも実感してきました。園や学校は、地域の人と共に、地域に根ざした関わりの拠点となる社会的機能を有しています。イタリアのコミュニティ思想と日本の地域が大事にしてきた価値は、必ずしも同じではないかもしれませんが、ですが、子どものことを共に語りながら笑顔が生まれ、つながりが生まれることが、その子どもが小中高校生そして大人になっても、つながりの基盤を生み出し、そして子どもはいずれ育っても大人たちの



子どもたちに新しい経験をつくっていくことが大切なため、単にその技術を学ぶのではなく、新たな「言葉」をつくるための道具として、デジタルツールも積極的に取り入れている。

き方向性は何なのかを考えるヒントがあると感じます。それは現在言われているSDGsの思想ともつながるものです。

一方で、人工物としてのデジタルツールに子どもが多様に関わることで、たとえば電子顕微鏡で視点を拡大したり場を拡張したりすることで、子どもたちがそこに没入することが容易になる工夫も図られます。実物投影機の時代からデジタルツールの時代へと、その環境の探究も、レジャ・エミリアではなされてきています。PCソフトで簡単に色を変えたり写真を取り込んだり、複写を数多くしたり、感じ方や見方を変えることで、*「100の言葉」*の可能性を拓き、想像的世界を豊かにすることもできます。またレジャ・エミリアの実践は、園だけではなく地域やまちをも積極的に環境とし、さらに子どもが市民として活躍できる教育と言うこともできます。

日本では、伝統的に「環境を通して行う教育・保育」を大事にしてきました。しかし一方で、待機児童の増加と共に新設園では自然に触れる園庭

などの空間も持てません。閉じた園空間のなかで長時間を過ごす子どもたちも増え、また児童期以降の子ども同士の活動も戸外から室内へと転じてきています。子どもを取り巻く環境の変化のなかで、私たちは何を大事にしていけるのでしょうか。

日本には、命や自然、地域を慈しむ文化や思想があります。しかしそれと同時に、グローバル時代、地球温暖化や環境汚染など大きな問題は大人の課題と捉えがちです。そうしたなかで地球環境保護について、レッジョ・エミリアが訴える地球というひとつの惑星に住む市民として、子ども時代は何を大事にしていけるかを問い直すことも大切ではないかと考えられます。私たちそれぞれがレッジョ・エミリアの実践から何を学べるのか、それはさまざまです。大人になっても、子どもと共に驚きや不確かさを問う問いをいかに持つのかどのような対話の輪を子どもを中心として地域のなかにつくり出すのか、そこへのひとつの展望をレッジョ・エミリアは投げかけているのではないのでしょうか。

子どもの声を聴くこと、そして子どもの可能性を捉える記録やそこから生まれるイメージを中心に、地域の大人たちも対話をはじめると共に、レッジョ・エミリアは新たな価値を提示しています。それは、何ができたかや、どのような成果なのかではなく、一人ひとりの表現としてのアートを大事にし、自然を大事にしていく共生の価値観

ました。しかしそれだけではなく、レッジョ・エミリアの実践が20年間をこえて私たちを惹きつけ続けるのは、常に変わらず大事にされている哲学と環境があると同時に、新たな道具などにも常に挑戦してきている点があるからです。

現在グローバル化、デジタル化が社会のなかで急速に進んでいます。ITというと、スマホやゲームといった子どもたちによろしくないものという言説が、特に幼児期や児童期向けに巷にあふ

プロジェクトなどにも近年取り組みられています。そこには、私たちがひとつの地球という惑星に住む地球市民として、環境と共生していく感覚を培うことが大切にされています。星や太陽などへの関心も、そうした視点から生まれます。グローバル化のなかで、ひとつの地球環境を大事にするという共生思想があります。グローバル化ということですが、グローバル化のなかで、私たちが持つべ

連帯を生み出す可能性を持ちえています。地域の
人と共に子どもが示す可能性と、聴き学ぶことでの
つながりから始まるコミュニケーションづくりは、
ネットワークの時代、人の絆が閉じられがちな時
代だからこそ、私たちにひとつの示唆を与えてく
れているのではないのでしょうか。

を私たちに提示しているということです。

子どもの可能性をアートで引き出す専門家「アトリエリスタ」(上)は子どもたちの言動や教師とのやりとりなどを細かく記録する「ドキュメンテーション」(中)を行う。それらをまとめて教室に展示することで、子どもの学びの軌跡がひと目で分かるようになっている。また子どもと子ども、親、教師をつなげる役割も果たしている(下)。

Jul 2020 18